

## 飼育ニホンザル成体オス 2 頭の社会関係

靖本 光

**【目的】**動物を飼育する際の目標の一つとして、当該動物の行動や社会関係を自然状態に可能な限り近づけるといふものがある。そのためには、飼育個体の行動や活動内容、そして飼育動物同士の社会的な関係性を適切に把握して評価する必要がある。ニホンザル (*Macaca fuscata*) は、厳格な優劣関係をもつ霊長類種であり、多様な社会行動を頻繁に行うため、個体間の優劣に関わる行動や親和的社会行動を詳細に把握しておく必要がある。また飼育動物の行動は、飼育檻の構造と深く関連することも知られている。飼育環境を適切に設定して、飼育個体のエンリッチメントを向上させることは、現代の動物飼育の現場においては欠かせない取り組みとなっている。そこで本研究では、実験施設内で飼育されていたニホンザル成体オス 2 頭について定量観察を行い、順位関係を主とした社会関係と、社会関係と飼育檻の構造物の関連について明らかにすることを目的とした。

**【方法】**本研究は大阪大学大学院人間科学研究科附属比較行動実験施設別館屋外飼育施設において自由に行き来が可能な左右に隣接した同サイズの 2 つの飼育檻 (幅 300 cm、高さ 250cm、奥行き 200cm) で飼育されていた血縁関係にある 2 頭の成体オスニホンザル M02G (15 歳) と M04G (13 歳) を対象に実施した。飼育檻には、木材が数本立体的に組み立てられていた。個体追跡法による点観察法と全生起法によって個体の行動データを収集し、総観察時間は 14 時間、総観察セッション数は 24 回であった。

**【結果と考察】**観察の結果、劣位個体に接近しその場から追いやる行動であるサプラント行動の 60 分あたりの生起頻度は M02G で 4.8 回、M04G で 0 回、マウンティング行動の 60 分あたりの生起頻度は、M02G で 0.8 回、M04G は 0.2 回であった。以上より、M02G が優位個体であると考えられた。親和的交渉である毛づくろいは 2 個体どちらからも生起したが、2 個体間で生起率、生起頻度に大きな差はなかった。2 個体間には攻撃的交渉は一度も観察されなかった。M02G は檻の中を約 50% の生起率で歩き、M04G はその場に静止している生起率が約 95% であり、2 個体の近接率は約 10% であった。M04G の移動は主に M02G の接近によるサプラント行動の生起によるものであり、個体間の距離は M02G が移動することで変化することが示唆された。止まり木の数が多く、立体的に構築されている左檻にいる生起率が 2 個体とも約 60% であり、2 個体の近接率は左檻では約 10%、右檻で 20%、個体間の距離が 3m 以上の生起率は左檻では 35%、右檻では 10% であった。以上より複雑な構造となっている檻では個体間の距離が大きくなるため M04G は左檻にいることが多く、攻撃的交渉が左檻において観察されなかったことから、近接する頻度が低くなることで攻撃的交渉が起こりにくくなると考えられた。構造物を利用した行動レパートリーとして、檻をゆする、木をかじるという行動が多くみられた。檻をゆする行動について、優位個体である M02G で 60 分あたりの生起頻度が 1.8 回、M04G で 0.4 回と優位個体である M02G でより生起することからこれが自然状態でも生起する木ゆすりなどの示威行動ではないかと考えた。また、木をかじる行動は 2 個体ともに生起頻度 60 分あたり約 10 回、生起率約 5% と高い値となった。栄養状態に乏しい積雪地帯のニホンザルは冬季に樹皮をかじって採食を行い、夏季では樹皮を採食することはほとんどないが、このような一年を通して頻度の変化が観察対象個体にあるかは今回の観察では分からなかった。この木をかじる行動が一年を通して同じ頻度で行われるのであれば、ストレスの指標となる常同行動と示唆される。栄養状態の良い飼育下において季節による変化があれば、木をかじるという行動に乏しい栄養状態をしのぐこと以外の理由があると考えられる。このことを明らかにするためにさらなる長期の観察が望まれる。(比較行動学)